

学習指導案の一般例を考える

指導案の書き方がわからない、という声は多い。研究にスタンダードモデルが存在しないように、指導案にも定型や定義はないが、一般例としての指導案の書き方をまとめてみた。

■ 学習指導案の例と「学習指導のまとめ」

研究のまとめ方に絶対的なものがないのと同様、指導案も決まった形式はない。特に授業展開の提示の部分については、教育工学的なフローチャート式で示したものや、教師の発問や想定される子どもの回答をすべて台本形式で示したものなど、執筆者の個性や思いによって様々な指導案が存在する。

p. 52、53 は、一般的に見られる指導案の形式例である。

指導案に形式は問わないが、授業者の思いや教材・指導等の必然性が明確に読み取れるものである必要があるのは研究のまとめと同様である。

通常、指導案は授業の仮説に相当する内容で完結する。指導案が「案」である所以である。

p. 49～51 は、一単位時間の授業について、「指導案作成→授業→評価・考察」という流れを研究パターンⅠ型として捉え、全体像を「学習指導のまとめ」として示したものである。

この「学習指導のまとめ」の流れは次の通りである。文頭の○の数字は、「学習指導のまとめ」の各項目に対応する。

1. 単元、題材の全体像を示す	2. 本時について記述する	3. 授業後の評価を記入する
① 題材、単元のタイトルを示す	⑦ 本時の目標及び指導の観点を記述する	⑬ 評価規準に基づく評価結果を記入する
② 指導する学習指導要領と解説の内容を示す	⑧ ①の、題材の指導計画における位置づけを記述する	⑭ ⑬について、結果を考察する（指導方法、教材についての振り返り）
③ 小学校または中学校の学習での指導要領の内容を示す	⑨ ①に比した生徒の状況（実態）を記述する	※授業をしてわかったことや計画の修正などを朱書きで書き入れるなどして検証し、次時や次年への指導の蓄積として生かす。
④ 題材の目標を示す	⑩ 本時の授業の展開を示す	
⑤ 指導計画（または評価計画）を示す	⑪ ③を鑑みて、①を達成するためにどのような指導を工夫したか（使用教材、指導形態等）を記述する	
⑥ 指導計画（または評価計画）作成のポイントを示す	⑫ ①について満足する結果となったかどうかをどのように検証するか（評価方法）を示す	

⑬、⑭の内容は通常の指導案にはない項目であるが、研究授業などの際には、これらの欄を設け授業後に記入する作業を行うと、授業の成果を検証でき次の指導に生かすことができる。

◆ 「学習指導のまとめ」の例

指導計画作成の根拠を示す

① 題材名	将来を見つめたより良い食生活をしよう～その1. 良い食事とはどんな食事だろう
② 学習指導要領及び解説の内容	A (1) 中学生の栄養と食事
ア 生活の中で食事が果たす役割や、健康と食事とのかかわりについて知ること。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 栄養素は毎日の食事から摂取する必要があることを知る ・ 生活の中で食事が果たしている役割について知る ・ 食習慣を身につけることの重要性について理解する
イ 栄養素の種類と働きを知り、中学生の時期の栄養の特徴について考えること。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 栄養素の種類と働きを知る ・ 水の働きを知る ・ 栄養素の基準量が示されていることを知る ・ 中学生の栄養の特徴を知る ・ 栄養的に過不足のない食事を取る必要を理解する
ウ 食品の栄養的特質を知り、中学生に必要な栄養を満たす1日分の献立を考えること。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本食品標準成分表について知る ・ 食品群別摂取量の目安について知る ・ 食品群別摂取量の目安を用いて、中学生の1日分の献立を考えることができるようにする

③ 小学校の該当内容

日常の食事に関心をもって、調和のよい食事のとり方が分かるようにする。

ア 食品の栄養的な特徴を知り、食品を組み合わせるとる必要があることが分かること。

イ 1食分の食事を考えること。

学習の積み上げを示す

④ 題材の目標

- 【関心・意欲・態度】 食生活をよりよくするために、学んだことを活用しようとする。
- 【工夫・創造】 中学生の栄養と食事について課題を見付け、その解決を目指して工夫する。
- 【技能】 中学生に必要な栄養を満たす食事の取り方に関する基礎的な技術を身に付ける。
- 【知識・理解】 中学生の栄養と食事に関する基礎的な知識を身に付ける。

⑤ 指導計画と各時間の目標

内容	時間	生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
1) 給食の分析Ⅰ ・ 給食の献立を3つのグループに分類する ・ 3つのグループに含まれる栄養素と働きを知る	2	・ 栄養素は毎日の食事から摂取する必要があることの根拠に気づく		・ 日本食品標準成分表から食品を探することができる	・ 栄養素の種類と働き、水の働きを知る
2) 自分に必要な栄養 ・ 食事摂取基準各栄養素の必要量を知る	2	・ 自分の栄養素の基準量を知ろうとする	・ 栄養的に過不足のない食事を取る必要を理解する		・ 中学生の栄養の特徴を知る
3) 給食の分析Ⅱ ・ 給食献立を6群に群別 ・ 各食品群の必要量の提示	2			・ 食品を6つの食品群に群別できる	・ 「食品群別摂取量の目安」について知る

<p>4) 自分で作る献立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食と組み合わせた1日の食事を考えてみる ・食事の役割とは何か 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中で食事が果たしている役割について考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・食品群別摂取量の目安に従って、中学生の1日分の献立を考える <p>(1/2 本時)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・食習慣を身につけることの重要性について理解する
---	---	--	--	--

<p>⑥指導計画作成のポイント</p>	<p>○小学校での学習を生かし、実生活と関連付けながら見通しを持った学習ができるよう工夫した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食生活領域学習を、1部を理論編、2部を実践編として見通せる構成にした。 ・1時間目は小学校の内容を扱い、そこから発展する形にした。 ・全員に等しく関わりのある給食を題材にした。 ・同じ題材を繰り返し使用し、知識の蓄積が実感できるようにした。
---------------------	--

<p>⑦本時の目標 (指導の観点)</p>	<p>食品群別摂取量の目安に従って、中学生の1日分の献立を考える。(工夫・創造)</p>
---------------------------	--

<p>⑧指導計画上の位置づけ</p>	<p>本題材8時間中の7時間目。小学校時の「1食分の献立作成」から発展して、1日分の献立を作成する。献立作成は、様々な知識や技能を集約し活用しなければできない作業であり、工夫や創造する力を育てるのに適した学習である。</p>
--------------------	--

<p>⑨生徒の状況</p> <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px 0;"> <p>指導の土台となる、子どもの実態を記述する</p> </div>	<p>食品を6群に分類することについては、食品成分表を参考にしながらすべての生徒がほぼできるようになっている。食に関する関心は高く、特に自分の作った献立を実際に調理してみたいという思いを持つ生徒も多い。</p> <p>しかし、調理経験は少なく、食品と献立、食品と調理方法が具体的にイメージできない生徒も多いと思われる。</p> <p>作業では、生徒同士で相談しあうことが自然にできる関係ができています。</p>
---	---

⑩本時の展開

活動内容	分	生徒の活動	指導と支援	教材等
1. 本時の学習内容の確認	5	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の1日の献立を作成することを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の振り返りと共に、食品群別摂取量の目安の表のページを確認するよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食品成分表
2. 食品群別摂取量の確認		<ul style="list-style-type: none"> ・給食分析IIで行った6つの群別をワークシートで確認し、食品群ごとに不足している重量を計算する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・群ごとの合計重量を記入済みのワークシートを配布。必要量と不足分は、以後の作業内容の確認のため各自で記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート(献立作成表)
3. 朝食と昼食の献立作成		<ul style="list-style-type: none"> ・群別摂取量の目安の必要量を満たす朝食と昼食の献立を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の調理実習例や食品成分表、給食の献立表を参考にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食献立表
4. 献立の工夫のまとめ		<ul style="list-style-type: none"> ・献立のポイントをワークシートに記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作成した献立のセールスポイントとして表現させる。 	

①指導方法の工夫	内容	・ 3食分の献立をすべて考えるのは難しいことから、前時の給食分析IIで扱った給食を共通の昼食として位置づけ、朝食と夕食を考えるようにする。
	学習形態	・ 個々に献立作成力をつけさせる目的から、個別活動とする。 ・ 作業の中で、近隣席の生徒との協議を認める。
	使用資料	・ 食品の検索のために各自の食品成分表を使用する。 ・ 献立や調理法について調べるため給食の献立表を使用する。
②評価規準と評価の方法	<p>評価規準：食品群別摂取量の目安を用いて、中学生の1日分の献立を考えることができる（工夫・創造）</p> <p>評価方法：作成した献立表と工夫点の記述により授業中を通して授業後に評価</p>	
③評価規準において想定される生徒の状況及び実際に見られた状況	Aと判断される生徒の姿の想定	
	評価実態	・ 調理法や味が重ならないように作成している。（3名） ・ 自宅の畑にある旬の食材を意識して取り入れている。（2名）
	5名 / 35名	
	Bと判断される生徒	
評価実態	・ このうち5名の生徒は時間内に食品の重量まで入れることができず、終了後に完成したが、工夫しながら献立を作成することができたので概ね満足すると考える。	
29名 / 35名		
Cと判断される生徒の想定と支援方法		
<p>・ 何から考えてよいかわからず作業をすることができない →まず主食を決めるよう促し、一汁二菜をベースに考えることを指導する。 また、教科書の調理実習例や給食の献立を応用させる。</p>		
評価実態	・ 食材の理解が不十分なために、主菜と副菜のイメージが持たず、献立の工夫まで至らなかった。	
1名 / 35名		
④考察	<p>・ 予想以上に献立作成には時間が必要であった。Aと判断した生徒は不足する食品群からすぐに献立をイメージすることができたが、多くの生徒は具体的に献立名をあげるができなかった。</p> <p>・ そこで、朝食は自分が実際に食べた献立を入れてもよいこととしたが、これは献立作りの端緒として有効だった。</p> <p>・ どうしても「食べたいもの」「好きなもの」で献立を作成する傾向が見られるため、最初から主菜または副菜に1品、好みのものを入れさせ、それを軸に他の献立を考えさせる方法が良いと思われる。</p> <p>・ 主菜となる食材、副菜となる食材の理解について、献立の作成前に再度確認しておく必要があった。</p> <p>・ 次時の「食事の役割」において、作成した献立を元に、食事の意味を確認する。</p>	

授業後に実践の結果及び考察を記入する

学習指導案 様式例

学校名、学年 組（男女人数）、年月日（曜）校時（時間）、場所、指導者名

1. 題材 ・単元

※教科によって題材名、単元名となる。
※学習指導要領の該当内容番号も付記しておくとい。

2. 目標

※この題材・単元をとおして子どもに付けたい力を、学習指導要領と関連付けて具体的に記述する。
※子どもの立場から「～しようとする」「～できる」「～を知る」「～を理解する」等の表現で箇条書きにする。
(文末に評価の観点をカッコ書きで示す。評価計画と整合させること。)

3. 基盤

※[2. 目標]を実現するための基盤という視点で記述する。項目分けせず総合的に記述しても良い。

①教材・題材観
教材・題材の概要、これまでの学習内容との関連を示しながら、目標を達成するために有効と考える教材・題材の性格を記述する。

② 児童・生徒観
児童・生徒に付けたい力や望む姿、それに比較した現在の児童・生徒の実態(学習・生活経験、関心・技能・知識など)を記述する。

③ 指導観
目標を達成するために有効と考える指導上の方針や工夫(指導形態、支援・評価方法、教材・資料など)を記述する。

4. 指導と 評価の 計画

※題材・単元を構成する小題材・小単元の名称を書き、指導内容と配当時間、評価計画を書く。
※本時の位置付けが明確になるように示す。

(例)

小題材・ 内容	時間	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1. …	1	…………… …【観察】			
2. … ①… ②… ③…	3 本時			…………… …【作品】	
3. …	2		…………… …【学習カード】		
(参考) 評価規準の 表現例		・～に関心を持っている ・～しようとしている ・～に取り組んでいる ・～の態度が見られる	・～について考えている ・～を工夫している	・～ができる	・～について説明できる ・～が分かる ・～が言える ・～を理解している

※評価計画は、本時が含まれている小題材(この場合は2.)についてのみ示してもよい。

※評価規準に、【 】のように評価の方法を付け加えるとわかりやすい。

5. 本時

(1) 目標

- ※「2. 目標」を実現させるための本時の目標を記述する。文末には関係する観点を付記するとよい。
- ※「4. 指導と評価の計画」と整合していること。
- ※目標が二つ以上ある時は箇条書きにし、複数の観点が混在しないようにするとよい。

(2) 展開

学習内容・学習活動	時間	指導上の留意点と支援 ・評価 [観点]と方法	資料、教材・教具
<p>○児童・生徒の立場からの記述</p> <p>※児童・生徒が学習する内容や具体的な活動について経時的に記述する。</p> <p>※「～に気付く」「～について考える」「～について話し合う」などの表現となる。</p>		<p>○教師の立場からの記述</p> <p>※指導の方法、工夫</p> <p>※予想される児童・生徒の反応や支援の場面</p> <p>※教材や資料の用途や使用場面</p> <p>※発問</p> <p>※「～を知らせる」「～するようにする」「～を考えさせる」などの表現となる。</p> <p>○評価場面に評価内容を記述</p> <p>※(1)の目標と整合させる。</p> <p>※評価の方法も記述する。</p>	<p>※左欄に対応して使用場面に記入する。</p> <p>※教師と児童・生徒のものは分けて挙げる。</p>

(3) 評価

※授業の中で児童生徒に見られるであろう姿の具体例を示しておく。授業後に検証することで客観性のある評価となり、指導や授業の改善につなげることができる。

<p>本時の評価規準</p>	<p>※ 評価規準を観点ごとに記入する。「4. 指導と評価の計画」「5. 本時(1)目標」の内容と整合していること。</p> <p>※ この記述が「概ね満足できる」子どもの姿(B)となる。</p>
<p>十分満足できると判断される子どもの姿</p>	<p>※ 「十分満足できる」(A)と判断できる子どもの姿を予測して記述する。</p> <p>※ 複数記述して、授業後検証できるようにする。</p>
<p>支援が必要と判断される子どもへの支援方法</p>	<p>※「概ね満足できる」(B)に達しない子どもの状況(C)を予測し、その状況が現れた場合の支援方法を記述しておく。</p>

その他:

- ※ある研究に基づいた指導案ならば、「研究の視点」を項目として挙げる。